





さぎし
詐騎士 4


かいとーこ
Kaitoko



RB

レジーナ文庫






登場人物
紹介




ノイリ ▲

ルゼの敬愛する聖女。
現在ニアスの子を妊娠中。




▲ニアス

ノイリの夫。魔物の王族の一員で、腕の立つ武者。



ニース ▲

はくがい
白鎧の騎士団一の剣士で、
グランディナの婚約者。




グランディナ ▲

ギルネストの双子の妹。
研究熱心な魔術師。




カリン ▲

ルゼの仇である
バルデス家の娘。
ある事件を機に
ルゼと親しくなる。



ティタニス ▲

ルゼと同じ孤児院で育ち、
彼女に想いを寄せる少年。



ゼクセン ▲

ルゼと一緒に騎士に
なった女顔の美少年。



ギルネスト ▲

ランネル王国の第四王子。
攻撃系の魔術の威力は国一番。
別名「サディスト」。



ルゼ ▲

訳あって最近まで性別を偽り、
騎士をしていた女の子。
かいせいのつ
人や物を操る傀儡術が得意。



ラント ▲

小柄なウサギ型のじゅうぎく獣族。
ルゼを攻撃したのが運の尽き(?)で、
現在彼女のペット状態に。

目次

書き下ろし番外編

子供達の事情

357

詐欺士 4

7

詐^さ
騎^ぎ
士^し
4

第一話 積み重ねの関係

チチチと、小鳥のさえずりが聞こえた。

暖かい羽毛布団の中で枕を抱きしめ、顔を埋めて眠っていた私は、ふと物足りなさを感じて、思い切り腕に力を込めてみた。しかしそれは私の求める抱き心地ではない。

私が求めているのは、この羽毛の枕の持ち主だ。

切ない吐息が漏れる。

時計を見ると、いつもよりも早い時間だった。

時計なんて、子供の頃は贅沢な物だと思っていた。日の傾きや星の位置で、時間など何となく分かるから、なくても不自由はしなかった。しかし今は、当たり前のように寝室に置かれているのだ。

傀儡術の呪文を唱え、身体を傀儡人形のように操った私は、ベッドから出て伸びをする。傀儡術とは文字通り人、もしくは物を傀儡にする魔術だ。足の悪い私は、この傀儡術

を自分に使って生活している。これがなければまっすぐ歩くことさえ難しい。

凍えるような寒さはまだないが、着ているのは薄手のネグリジュエなので、布団から出ると少し肌寒い。また布団の中に戻りたくなる前に、手の届く位置に置いてあった上着を羽織る。

寒くなると足の古傷が痛んだりするが、今日はまだそこまでではない。身体の調子もいい。季節の変わり目は風邪を引きやすいが、以前と違って栄養価の高い物を食べ、無茶をせず、季節に関係なく快適に過ごせる住環境にいるから、今のところそんな気配も感じない。

部屋履きを引っかけて寝室を出ると、エノーラお姉様から借りた、ゼルバ商会の万能メイドのニナさんがいた。私がいっつもより早く起きたから一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「殿下とのご朝食の前に、何かお飲みになりますか？」

「ええ、目が覚める濃いめのお茶をお願いします」

「かしこまりました」

私は椅子に腰掛け、窓の外を見る。

ギル様——ギルネスト殿下が用意して下さったこの部屋は、窓からの眺めもよく、住

み心地のいい場所だった。私は夏の頃からずっとここに住み着いている。

この部屋は、たまにギル様の友人が泊まっていくだけの客室だったらしい。だから最初は立派な家具と、せいぜい一泊するのに必要な物が置いてあるだけの、温かみのない部屋だった。

今では私物も増え、誰が見ても女性が住んでいると分かる部屋になっている。

ギル様に買ってもらった小物も、ちゃんと窓辺に飾ってある。キャビネットの上には自分で編んだレースのクロスを敷いて、その上には陶器の人形と、ポプリが詰まったガラスの置物を載せている。

そういつた小さなことの積み重ねが、この部屋を女の暮らしくしていつたのだ。

しかし、もし私一人で管理していたら、小物など大切に仕舞い込んでしまおうから、きつとこの部屋は殺風景なままだっただろう。この部屋を作ったのは、二ナさんだ。全て彼女のセンスで作られた部屋なのだ。

自分の部屋とは思えないほど可愛らしくて、それでいて最初の頃よりも居心地がいい。「ルゼお嬢様、本日はよいお天気ですわね。最近肌寒くなってまいりましたが、本日は久々に暖かい一日になりそうですわ」

「二ナさんが言うなら確かですね。今日は少し薄着をしようかしら」

彼女の天気予報はよく当たるのだ。

「でしたら、寒くなった時のために上着を二着用意いたします」

二ナさんはお茶を注ぎながら言った。さわやかな芳香が立ち上り、私はそれを嗅ぎながら答える。

「それは楽しみね」

今日は午後から、彼女の本当の主であるゼルバ商会のエノーラお姉様が主催する、お茶会に招かれているのだ。

空には羊雲が流れ、少し冷たい風が髪を撫でる。

馬車から降りた私達を歓迎するかのよう、秋に咲く花々が可愛らしく揺れていた。

何という花かは知らないが、清楚という言葉が似合う、可憐な花だ。

葉先が花のように見える背の低い庭園樹と色とりどりの花が、玄関まで道を作っている。

二ナさんの言ったように今日は日が差していて、ここ数日の冷え込みが嘘のように暖かい。もちろん秋らしく風は冷たいので、上着がなければ寒いのだが、ついこの前まで暑さでひいひい言っていたことを思い出すと、まるで天国のように過ごしやすい陽気で

ある。

ここはエノーラお姉様が所有する屋敷の一つだ。都にいる時は、基本的にこの屋敷に寝泊まりしているらしい。先日、ある事件をきっかけに親しくなったカリンもここで世話になっている。

「素敵な庭ですね」

馬車を降りる時に私に手を貸して、そのままエスコートして下さっているギル様に言った。すると彼は、見ているだけならうっとりしてしまふような甘い笑みを返してくれた。

「確かに、エノーラに似合うな」

絶世の美女を母に持つ彼は、女の私よりもはるかに色っぽく笑う。

この方は私の主で、この国の第四王子のギルネスト殿下だ。庭に咲く晩秋の花々も、この王子様を前にすると色褪せてすら見える。彼にはもっと、艶やかな大輪の花が似合う気がした。

「さすがはギル様。ここが姉さんをイメージして作られているって、よく分かりましたね」

そう言ったのは金髪碧眼の可愛らしい男の子。私の双子の兄ということになっているルーフェスお兄様の親友で、私達双子の妹の婚約者、そしてこの集まりの主催者である

エノーラお姉様の弟である、ゼクセン・ホライストだ。

そのゼクセンが手を貸しているのは、ギル様の双子の妹君のグランディナ姫様だ。

そしてその後ろには、不機嫌なニース様ことエディアニース様。

最初はニース様が姫様をエスコートしようとする気配はあったのだが、姫様が迷わず手を差し出したのはゼクセンだった。ゼクセンには相思相愛の婚約者がいるからニース様も我慢しているが、本来エスコートすべきは、姫様の婚約者であるニース様だ。

見た目はいかにも貴公子といった金髪碧眼の美男子で、ギル様よりも背が高い。それに白鎧の騎士団一の剣士と言われるほど立派な騎士様だし、身分の上でも姫様に相応しい方なのだ。しかし、彼は姫様からとても嫌われている。

姫様の顔と手には火傷があるのだが、その原因もニース様だという。その罪悪感から、大人になっても素直に愛していると言えないようだ。

「ネイド、テイタン、本当に一緒に来なくていいのか？ 今日カルパが裏方を任せられているから、きつと美味しい物があるぞ」

ギル様は御者兼護衛としてついでにきた騎士達に問う。

ネイドさんはギル様の子飼いの配下で、テイタン——テイタニスとは私と同じ孤児院で育った兄のような人だ。

「俺ら、今日は仕事で来てますから。貴族の集まりにのこのこ出ていくなんてとてもでも」

「それに菓子なら裏にいてももらえますし。カルパはそういうところは気が利いてるんで、心配しないで下さい」

王族の護衛も騎士の仕事だ。ギル様一人なら護衛などいらんと言うところだが、今日は姫様もいるので彼らもついてきたのだ。

「それに殿下の護衛って仕事って気がしなくて楽なんですよね。ゼルバ商会の使用人は美人が多いし。彼女達に騎士様ってちやほやしてもらえると気分がいいんですよ。なあ、ティタン」

「ええっ!？」

真面目なティタンは突然そんな話を振られて戸惑ったような声を上げた。

「そ、そんなつもりはないぞっ」

慌てたティタンは、私の方を見てそう主張する。私に勘違いをされて孤児院の皆に報告され、里帰りする度にからかわれるのだけは阻止したいのだろう。

普通、こういう真面目な奴は先輩に面白がられて花街はなまちに連れていかれるのだが、彼はその洗礼を受けた形跡がない。あまりにも真面目すぎるからだろうか。

ゼルバ商会の美女達ならしっかりした人ばかりだし、ティタンが女性に慣れるにはちょうどいいかもしれない。相手のレベルが高すぎるからお付き合いでするのは難しいだろうけど、もし好きな人でもきたら心の中で応援することにしよう。

私達は二人を残し、ゼクセンに案内されて屋敷の中に入った。

華やかさと落ち着きの両方が備わった、いかにも女性が好みそうな内装だった。

去年の今ごろは、ルーフエスお兄様のふりをして男装し、騎士をしていたというのに、ずいぶんと状況が変わってしまった。

私と彼が双子だと聞かされて数ヶ月経つが、それは孤児として育った私をオブゼーク家の人間として迎え入れるための方便であると、他でもないこの私が確信している。

オブゼーク家の当主、すなわち私の父となった人が言うには、男女の双子は不吉で女が男の方を殺すとか言われているため、私と兄を引き離し赤の他人として育てたのだそう。兄はとても病弱だったし、私が六歳までいたのも聖女となるべき方が育てられていた神殿だったから、なんとかその理屈も通るだろう。そうでなくても男女の双子の片割れが養子に出されることは珍しくない。

まあ、それが真実かどうかなどどうでもいい。私は与えられた『オブゼーク家の令嬢』の役を全うするまでだ。

今日はゼルバ商会主催のお茶会でも、いつもと少し勝手が違う。いつもはデパートのサロンでおしゃべりをするのだが、今日は初めてエノーラお姉様の私邸に招かれたのだ。ここで聞くお茶会には、商売抜きでも付き合いたい人のみ呼ぶらしい。

「こちらです」

ゼクセンは姫様に笑みを向けながら、目当ての部屋のドアを示した。ドアの傍に立つ使用人が優雅に一礼すると、慣れた手つきでドアを開く。

何度も経験しているが、なかなかこの扱いに慣れることが出来ない。

やや緊張しながら入ると部屋の中には、顔見知りの女性達がいた。私達のように男性を伴っている人もいれば、子供を連れてきている人や一人で来ている人もいる。

ギル様はその顔ぶれを見回してから、私に微笑みかけた。

「メリア達はまだ着いていないな」

「マティアさんもまだですね」

広い客間から見える庭園は、入り口から見た時とはまた別の顔を見せていた。見たことのない庭木が自然な感じで整えられ、周りには秋から冬の花々が咲きこぼれている。

可愛らしくて、品の良い庭だ。

私はギル様と共に、使用人に案内されて席に着いた。

王族二人の到着に、客人達が次々と挨拶にやってくる。一通りの挨拶を聞いて、私達はようやく一息ついた。

まだお茶は出されていないが、テーブルにはお菓子が並んでいた。

「あら、美味しそう。これは何のケーキかしら」

甘い物に目がない姫様は、お菓子を見て相好さうじょうを崩す。オレンジ色だから、人参のケーキだろうか。

「そちらは野菜のケーキでございます」

声をかけてきたのは、給仕をしていた白い服の男の子だ。この服はお茶屋フレイメの制服である。

姫様を前にしているせいか、その笑顔は緊張で強張り、頬も赤い。

「あら、珍しいのね」

「野菜嫌いのお子様のためにご用意いたしました。食べやすいよう、果物も混ぜております」

「ああ、そういうこと」

姫様は周囲の子連れのご婦人方を見て納得した。

「他にもたくさん用意しておりますので、ご賞味ください。すぐにお飲み物をご用意い

たします」

「ありがとう」

私とそれほど歳の違わない子だけど、一生懸命で可愛い。奥様方は、若くて可愛い男の子がこうして一生懸命にしている姿を微笑ましげに見守っている。

「ところで今日の給仕はカルパじゃないの？」

私が問うと、彼は頷いた。

「今日はお茶の試飲会も兼ねております。彼の魔力で美味しくなりすぎでは参考にならないため、今は菓子作りに専念しております。準備が終わり次第参りますので、お待ち下さいませ」

つまりこのケーキは、ここで作った物なのか。

カルパはフレレメの経営者である青年だ。手元で保管しているだけで食材の味を良くし、調理をすれば一流の料理人顔負けに美味くなる、そんな羨ましい魔力の持ち主だ。

彼は自分を慕う孤児達に職を与えるためにと、自分が好きなお茶の間屋を始めたらしい。色々あつて彼らをマフィアから助けてやって以来の付き合いだ。

カルパは最近、「無茶を言わない上客だ」と言つて、喜んでエノーラお姉様の依頼を受けている。

とはいえその『無茶』というのは、気に入った男の子を自分の所で雇つてやるとかいふ、言わば『困つてやる』的なものである。確かにそれと比べたらエノーラお姉様の仕事は無茶とは言えないだろう。

ちなみにそう声をかけてくるのが女性ならまだいいのだが、意外に男性も多いらしい。カルパが所有するアパートの外壁には、ガラが悪く見えるような落書きが施されているのだが、一番の目的はそういったタチの悪い客を近付けないためだと言う。

にわかには信じられないが、そういうことが本当にあつたからこそ、彼はそんな風に警戒するようになったのだろう。

彼が商売をしているのは、皆のためだ。万が一、変な噂でも立てば商売が成り立たなくなる。カルパ一人だけならどこでも働けるだろうけど、彼を慕つて集まる子供達に健全な職を与えるには、自ら事業を興し規模を大きくしなければならぬのだ。単にカルパ自身がお茶を好きすぎるといふのもあるんだらうけど。

それでいて、彼には妙に人が良かったり、世間の相場を知らなかったりと、ちょっと騙されやすい一面もある。エノーラお姉様に、綺麗な新しいベッドを買つてあげるからお茶の保管室で寝てみたらどうだ、と言われて本当にそうしたり、ものすごく高くて文法的価値もある食器の数々を、割るのが怖いからという理由でエノーラお姉様にタダ目

然でレンタルしたりしてるのだ。

まあ、食器類は割れた時のためにかけておく保険料も馬鹿にならないみただから、それで正解なんだろう。あれは本当に高くて手に入らない食器なのだそう。

「こちらは当店の新作です。ご賞味ください」

柑橘系の香りのするフレーバーティーを出されて、姫様は微笑んだ。

私は周囲の視線を感じながら、お茶を口に含む。姫様がこんな場所に出てくるなど初めてだから、注目されるのも仕方がない。

ちなみに今回のお茶会に招かれているのは、バルデス家との関係が薄く、古くから高い地位かゐにあり、おかしなことをしなくても確かな地位と財産を保持できる——つまりこの前の誘拐事件とは関係のなさそうな人達だ。

その事件のせいで落ち込んでいるバルデス家のカリンとその兄のベナンドを慰めようって趣旨のお茶会なのだから当然だろう。

先日、カリンと私は誘拐された。何故誘拐されたかは結局よく分からなかったが、その時にバルデス家の当主であるカリン達の父親は殺され、その後妻である継母まごははは貴金属を持って逃げた。

私が今ここにオブゼーク家の娘として存在することになった大元の原因である、七年

前の聖女誘拐事件の首謀者ではないかと言われていたバルデスだったが、私が色々動き回ったことによって、当時の仲間から切り捨てられたのだろうとギル様は見ている。

現在ベナンドはその後始末で忙しく、自分の屋敷にしながら誘拐されたカリンは、事件以来ずっとエノーラお姉様のもとでお世話になっている。エノーラお姉様の屋敷ならどこよりも警備は厳重だから安全だ。その上カリンの隣には、私が貸し出したラントちゃんがいる。

エノーラお姉様の所にいるなら護衛としての彼は必要なかったかもしれないけど、癒しにはなつたはずだ。

しかし、その主役達の姿が見えない。

「カリン達居ませんね。何かお手伝いしているのかしら？ 早くラントちゃんをぎゅぎゅっとしたいんですけど」

ラントちゃんのあのふわふわの毛と、嫌そうに細められる可愛らしいつぶらなおめめが、たまらなく恋しい。

「ああ、それなら今来たぞ。よかったな」

ギル様の視線を追って、私は入り口を見た。そこには兄を案内するカリンと、可愛らしいウサギ獣族じゅうぞくのラントちゃんの姿があった。

ラントちゃんは一張羅のジャケットを羽織り、今日もたまらなく可愛らしい。求めていたその愛らしい姿に、私は我を忘れそうになった。一人でベッドに入るたび、彼のふわふわな毛並みを思い出し、切なさを覚えていたのだ。

「あら、ごきげんよう、ギルネスト殿下、ルゼ」

カリンは私達に気付くと、こちらに来て礼をとる。大人のご婦人達の計算され尽くした挨拶とは違う、少しばかり隙を感じる、初々しくて可憐な仕草だった。

「少し痩せたか？」

「あら、お分かりになりました？」

ギル様のぶしつけな問いを聞いて、カリンは自分の腰に手を当てた。

「あまり食べていないのか？」

「いいえ、エノーラさんとラントが気遣って、食べやすい物を用意して下さるので、とても健やかに過ごしておりますわ」

つまり、食べやすくして栄養のある物を必要最低限しか食べていなかったら痩せたと。

胸も減ってないし、むしろ……

「カリン、綺麗になった？」

顔もほっそりしているし、化粧も変わった。前から化粧は控え目だったが、明らかに

腕が上がっている。

「そ、そうかしら？ もしそうだとしたら、きっとエノーラさんのおかげだわ。もちろんラントも」

カリンはラントちゃんに笑みを向けた。

「俺は何もしてねえよ」

久しぶりに見るラントちゃんは、相変わらず口が悪くて可愛らしい。よく見れば、耳の飾りにピンク色の花が挿されている。ここでもブラッシングをしてもらっているのか、毛並みも見るからにふかふかだった。

ラントちゃんは人間の腰くらいの身長で、可愛らしいことこの上ない、ウサギ獣族だ。そんな彼がお花を耳に挿している。

「ラントちゃん」

とうとう私は耐えきれなくなって彼に抱きついた。その毛並みに頬をすりつけると気持ちがいい。

「ああ、ラントちゃんだ」

夢にまで見たラントちゃんだ。ふわふわだ。つやつやだ。ラントちゃんだ。

「うぜえよ」

「ああ、この暴言、やっぱりラントちゃんだ。独り寝の夜はとっても寂しいの」
 「この前まで一人で寝てたのに、甘えたこと言ってるじゃねえよ」

ラントちゃんは見た目はとても可愛らしく、無害そうなウサギさんだが、中身は立派な成人男子だ。職業は薬師^{くすりし}。前は盗賊もやっていたのだけど、私が生け捕りにして、こうして有効活用しているのだ。

「ルゼ、離れ離れになって寂しかったのは分かるが、そろそろ離れてやれ」

ギル様に肩を叩かれ、仕方なく離してあげた。

「すまないな。こいつは普段動物にあまり懐かれなから」

ギル様が言わなくてもいいことを言う。確かに懐かれないけど、言うことは聞いてくれるのに……

「ラントちゃん、ここでの暮らしはどう？」

「どこも似たようなもんだ」

「そう。良くしてもらっているのね」

ラントちゃんはため息をついた。諦めきったそんな態度もまた可愛い。

私がラントちゃんに構っていると、脇に誰かが立った。

「おねえさま、ごきげんよう」

そんなませた挨拶をしたのは、ニース様の親戚であるメリアさんの娘、フィーちゃんだった。このフィーちゃんは私が騎士をしていた時に弟子にした、私と同じ傀儡術の才能がある女の子だ。もともと彼女もメリアさんも、私とその時の騎士と同一人物であることは知らないのだけど。

七歳になったかどうかという、まだ小さくて可愛い彼女も、淑女として成長しているようだった。

「あら、フィーちゃん、ごきげんよう」

私はラントちゃんから離れて挨拶する。

「ギル様、ごきげんよう」

「僕の方が後か」

「まあ、ごめんなさい。お気を悪くなさらないで下さいまし」

フィーちゃんは口元に手を当てて、ずいぶんと大人びたことを言った。

「女はこうやって大人になっていくのか」

拗ねるギル様にフィーちゃんが笑みを向けると、彼は笑顔になって、

「可愛らしいリボンをつけているな。とてもよく似合う」

と、彼女の金色の巻き毛を飾るピンク色のリボンを褒める。そしてその小さな手を取り、

大人の女性にするように、手の甲に触れるか触れないかという口づけを落とした。それに続き、ニース様も彼女の手を取る。

私は、そんな風に淑女として扱われる娘を微笑ましげに見つめるメリアさんと、その後ろにいるマティアさんとタロテスに視線を移し、挨拶をした。

「ごきげんよう」

「皆様ごきげんよう」

揃ってやってきた貴婦人達は、たおやかに微笑んだ。

メリアさんは娘よりも若干色合いの濃い金髪をした美女だ。私は騎士をやめた後にもたびたび彼女と顔を合わせているので、ルゼとしても親しくしてもらっている。娘のフイーちゃんが、師である『ルーフェス』に似た私に懐いているのもあるのだろう。

マティアさんは私が今家庭教師をしている、タロテスの母親だ。しばらく前までは勉強嫌いの息子に手を焼いて、げっそりと老け込んでいたのだが、タロテスが比較的眞面目に勉強するようになったせいも、ここ最近は何年相応に見えるようになった。エノーラお姉様にいい基礎化粧品を教えてもらい、気分が一新したのもあるのだろう。新しい商品を試すと、楽しくて心から若返るらしい。

この二人は元々知り合いだったが、私を通して何度か顔を合わせるうちに、近い年頃の子供がいるということでも親しくなったようだ。フイーちゃんは人間との挨拶を終えると、今度はお気に入りラントちゃんにぎゅつと抱きついた。子供のすることだから、ラントちゃんはすっかり諦めて受け入れている。「ラントちゃん、しばらく会えなくて、とってもさびしかったの」「女は皆そう言うんだよ」

ものすごく実感がこもってるな。その様子を見て、メリアさんがくすくすと笑った。

「ラントちゃんがいると、子守をしてもらえるからありがたいわ」

「そうですね。子守はラントちゃんの仕事ですもの。安心して任せられます」

ラントちゃんが私を睨みつけてくるけど気にしない。

私だってその『子守』してもらっているうちの一人なんだから。

それから少しして、私の親戚のウィルナお姉さんと、彼女を迎えに行ってくれたギル様の従弟のセルジアスが到着して、招いた客全員が揃った。

茶を売り込みに来た魔族まじくのテルゼと、お茶屋のカルバも表に出てきた。

馴染みのある人が多いから、初めてお茶会というものに招待された頃よりは緊張して

いない。本当は姫様もこういう場合は苦手だけど、ギル様と私が強引に連れ出したのだ。今はテルゼが用意した、新しいお茶の試飲をしているところだ。

出された色の濃いお茶を飲むと、何度か似たようなのを飲んだことを思い出した。しかし新しい物だと言っていたから何かしら違うのだろう。

「へえ、独特な味ですねえ」

「ブレンドした方がクセが無くて喜ばれそうだけど」

「俺はこのままでもけっこう好きだ」

そう感想を述べたのは、フレームの従業員達だ。給仕をしていた彼らも好奇心を抑えられなかったらしく、配膳を終えた後に飲ませてもらっている。

「ああ、確かに慣れないと顔をしかめられるからなあ。ブレンドしないと」

テルゼは少し困り顔で言った。魔族の特徴である銀髪は今日も黒く染められ、金色の瞳はギル様のような琥珀色こはまいろに変えて、魔族だと気付かれにくいようにしている。魔族らしいのは、褐色の肌だけだ。

こうしていると、本当に南方からやってきた人間の商人に見える。騒がれると色々と面倒なので、魔族の使者として宮殿に上がる時以外はこうして変装しているらしい。

「この癖なら、こんな感じで混ぜたら良いかも」

カルパは自分が持ち込んだ茶葉を、即席でブレンドして従業員に淹ひれさせ、テルゼの茶と混ぜた。

「あ、飲みやすくなった。すげえ、今まで色々試したけど、これが一番馴染んでる」

「そりゃあカルパさんは腕うでだけじゃなくて、舌も確かだから！」

フレームの従業員が、自慢げに胸を張った。

「そっか、腕うでだけじゃないのか。こりゃあエノーラが惚れ込むのも当然だな」

従業員達は同じように混ぜたお茶を皆に配り始めた。

そのカルパの腕うでに惚れたエノーラお姉様とはいえ、ウィルナお姉さんと話をして
いる。

ウィルナお姉さんは私——というカルーフエスお兄様の遠縁の女性で、人気の劇団の歌姫だ。彼女ほどの歌い手をお茶会に呼べるというのは、富裕層にとってはステイタスなのだそうだ。

いかにもギル様好みの細身の美女で、私もあれぐらい美人だったら、ギル様を誘惑してみるのがいいだろうと思うぐらいだ。男が美人に惚れるとは限らないが、何にしても美人の方がいいに決まっている。

「私はいいい妹を持って嬉しいわ」

妹とは私のことだろう。エノーラお姉様は私を通して、ギル様やウィルナお姉さんなど色々なコネを増やせたことをとても喜んでいる。

ちなみに、ゼクセンの義姉になる予定はあるが、その姉であるエノーラお姉様の妹になる予定はない。

でも妹と言いつ張るために、私に似合いそうなドレスを用意してくれたり、二ナさんを貸してくれたりと、色々世話を焼いてくれる。もしも私が何の役にも立たない、ただの親戚になる予定の女の子だったとしたら、ここまで気にかけてはくれなかっただろう。彼女はギル様と同じで、実力か利用価値がなければあまり相手に興味を持たない。

その上、あわよくば私とギル様に結婚してほしいなどと考えているようだ。私のような育ちの悪い女になんて恐れ多いことを期待してるんだと、呆れるしかない。

幸いなことに、私はまだ恋愛に興味を持っていないことは理解してくれているらしくて、今のところせいぜい可愛く着飾らせるだけなのだが、しかしエノーラお姉様にとっては残念なことに、そんな着せ替えに反応しているのはギル様よりも他の騎士だったりする。その様子を見る限りは、こんな私でも、結婚したいのに相手がいらない、なんてことにはならなそうだ。

だがそんな男性達に困らされることも多い。

その中でも対応に困るのが、ルーフェス様の身代わりをしていた時の上司であるアスラル様だ。彼は私を見かける度に声をかけてくる。そういえば男装していた時、おとり捜査のために娼婦の格好で街角に立っていたら、アスラル様が釣れてしまったっけ。

「詐欺士」と言われた兄との違いを印象づけるために、積極的にタダで騎士達の治療をしてやっているのも悪いのかもしれない。

騎士をしていた頃は、こっちが疲れるからって理由をつけてお金を要求していた。だから今はそれとは逆に、常に親切に、可愛らしく微笑みながら騎士達に接している。

男がそういう親切とか、微笑みに弱いのは知っている。男どもは多少綺麗な女より、そういう優しい女に惹かれるものだ。結婚詐欺師だって美女とは限らないことがそれを証明している。

ただ、このやり方によってどこまで男心が掴めるのかまではまだよく分からない。私は結婚詐欺の経験がないから、相手の反応を見て推測するしかない。

アスラル様以外にも何人か私に気があるっぽいのはいるんだけど、私のことをギル様の恋人だと思いつ込んでいるらしく、積極的に声をかけてこないものだから、余計に判断がしにくい。男達を誘惑するというのは難しいものである。

いや、本当の目的は私がルーフェス様に見えるようにするためなんだけど。

この猫かぶりは、楽しくもあるけど反面ストレスになることもあるから、孤児院や貴族の家での教師ボランティアがストレス解消になっている。

皮肉だなあ、色々。

「そういうえげルゼちゃん、楽器も大抵の物は弾けるんだって？」

私がお茶を飲んでみると、突然テルゼに尋ねられた。

「まあ、そこそこは」

「ノイリが、ルゼちゃんは自分より上手いって言ってたな」

「まあ、街でお金が取れる程度には色々。真似しやすいもの」

器用さが私の売りと言っている。

「せっかく歌姫がいるんだ。何か一曲歌ってもらいたいな。後で良い物をプレゼントするから」

「ええ、私は構わないわ」

ウイルナお姉さんは快く応じる。私も断る理由はないのでそれに倣う。

エノーラお姉様が屋敷にある楽器をいくつか用意してくれた。私はその中から堅琴を選び、ウイルナお姉さんの助言を聞きながら何度か鳴らして調律する。

「では」

準備が整い、私は堅琴を鳴らす。

歌と楽器は女らしい趣味かな。そこらの吟遊詩人よりはずっと上手いという自信がある。

私の演奏に合わせて、ウイルナお姉さんが歌い始める。

ギル様をも虜にするだけあり、綺麗な声と旋律が胸に響いてくる。これほど間近でのクラスの歌手の歌が聴けるのは、すばらしい幸運だ。広いホールで聞くとはまた違った趣がある。

恋歌が耳から入り込み、頭の中をゆっくりかき回す。私でも恋がしたくなるような、とても甘い声音だった。演奏しながら思わず私もその歌声に聴き入る。

何曲か歌い終えると、ウイルナお姉さんはにっこり微笑んで、

「お粗末様でした」

と言った。

今日は観衆相手ではないから、舞台の時のような挨拶はない。それでもギル様が未だにぼーっとしている。

「痺れたよ。ウイルナちゃんすごいなあ。ノイリも上手いけど、あいつは一曲でバテるからなあ」

テルゼも褒め称える。それは珍しく口説き文句ではなく、本気の賛辞だった。しかしノイリのは癒しの歌なのだから仕方がない。本当の価値は歌の魔力にあるのであって、歌声の素晴らしさはおまけのようなものなのだ。

「テルゼさんはお上手ね。ところで良い物って何なのかしら？」

先ほどのテルゼの言葉をすっかり覚えていたウイルナお姉さんは、うつとりするほど綺麗に微笑みながら尋ねた。

「ウイルナちゃんは贈り物なんてもらい慣れてそうだけど、やっぱり気になるの？」

「魔族の方の贈り物は初めてだもの。気にならない方がおかしいわ」

「確かに。じゃあ、ウイルナちゃんにはこれを」

テルゼはポケットの中から、何の変哲もない石を針金のようなもので留めたネックレスを取り出した。

「何かしら」

「こうすると分かりやすいかな」

テルゼは石を両の掌で包み、少しだけ開いて見せた。

「あら、光ってる」

ウイルナお姉さんは石を受け取って自分の手の中で確かめる。

「光石っていうんだ。地上じゃ珍しいようだからさ。周りに光がないと自分で光り出すから、地下では通路の明かりに使われてるんだけど、地上でも夜歩く時は便利だと思う。明るいとただの石だけど、真っ暗だともっと明るくなるからさ。一つあると便利なんだ」
他の皆もおおっと身を乗り出して石を見た。

「うれしいわ。便利な物をありがとう。普通のプレゼントには飽き飽きしていたのよ。

これは確かに便利そうね」

「君に喜んでもらえたなら、作ったかいがあったよ」

手作りなんだ……。本当にマメな男だなあ。

「ルゼちゃんにはちよっと特別な物を用意しているよ」

私は思わず首を傾げた。光る石を見せられた後だから、他の人達も興味津々だ。

「ルゼちゃん、白い翼のある生き物好きでしょ？」

「マリーちゃんくれるの？」

テルゼの白い鳥の名を出した。綺麗な白い妖鳥で、買うととても高く品種だ。

「マリーはやらないよ」

「じゃあヘルちゃんくれるの？」

ヘルちゃんとは、テルゼが拾った天族の少年だ。ノイリと同じ種族で、希少価値がと

てつもなく高い。

「もっとやらないよ」

さすがにヘルちゃんくれたらびつくりだね。

「他に何かあるの？」

白い翼の生き物なんて、鳥と天族ぐらいしか思いつかない。翼のある蛇もいるらしいが、私は爬虫類は好きではないし、そもそもそんなものの女の子にはプレゼントしないだろう。

「そろそろ届くと思うんだ」

「届く？」

「ああ。届いたら知らせが来ると思うから、それまでのお楽しみ」

「分かったわ」

何をくれるのか気になるが、私は待つことに苦痛を感じない。

彼が気が利くから、きつと私が喜ぶような物だろう。そういうところが彼の最大の美点だと思う。

私へのプレゼントが届くまで、皆はウィルナお姉さんの光る石に夢中だった。

ラントちゃんが言うには、光石は地下では珍しくなく、一般家庭でも普通に使われて

いる物らしい。こんな便利な物が今まで地上で出回っていなかったのは、光らせるにはちょっと特殊な処理が必要のため、人間がその便利さに気付いてなかったからだそうだ。ギル様とベナンドが、明かりと武器を携帯し、手が塞がることの多い夜警に便利ではないかなどと話し、それにテルゼとエノーラお姉様が乗って商談を始めた。

私は手持ち無沙汰になって、堅琴の弦を弾き遊んだ。ゆったりとした曲調で、故郷を思っ作られた曲だと聞いている。穏やかだが、秘めた情熱が感じられる旋律が私は好きだった。

しばらくすると、ウィルナお姉さんの鼻歌が重なった。

弾いている私自身にとっても、心地よいハーモニーだった。

「ルゼの音は癖が無くて良いわね。色んな弾き手と合わせているけど、自分は上手いんだあって自惚れた感じの、癖のある音を出す人が多いから嫌になるわ」

ウィルナお姉さんは、曲が終わると私を見てそう言った。

私はくすりと笑って言葉を返す。

「まあ、私は最初から歌の伴奏をするために習いましたから。声より目立ったりとか、変な癖で歌いにくくしていたら伴奏者失格ですよ」

ウィルナお姉さんはギル様が鼻屑にするほどの歌い手だ。その伴奏をさせてもらえる

だけでも弾き手としては光栄だ。

周りを見回しても、退屈そうな人はいない。子供達は光石こうせきに夢中なようだけど。カリンも調べに耳を傾けて、うっとりしていた。

ラントちゃんからの報告だと、最初の頃は夜うなされていたが、最近は普通に眠れるようになったらしい。

色々悩みは尽きないだろうが、生きて、安全な場所にいるだけありがたいと思ってもらわなければ。

彼女の隣では、ラントちゃんがお菓子にかじりついている。野菜のケーキがお気に召したらしい。カリンは時折その様子を見て微笑んでいる。ラントちゃんは口が悪いのが玉に瑕きずだが、ウサギとしての癒し効果は十分にあったようだ。

しかしカリンはふと顔を上げてギル様の方を見て、切なげに溜息をついた。

あれか。失恋した相手が、うっとりとして美女を見つめているから、心の傷に塩を塗られたのか。ギル様は本当にひどい男だ。ギル様がカリンを振った時は私も一枚噛んでいたし、今も騎士団の男の子達をからかっているから人のことは言えないけど。

「先生、本当に素敵です。才能豊かで羨ましいわ。頭が良くて、魔術も使えて、その上音楽の才能まであるなんて」

タロテスが石に夢中で大人しいからか、一層生き生きとしたマティアさんが私を絶賛してくれた。

魔術師などしていると頭がいいと思われがちだが、ただそう見えるだけだ。私の知識は一定方向に偏かたよりすぎている。うっかりするとそういうのは透けて見えてしまうものだが、こう言っているとところを見ると私の立ち振る舞いは成功しているのだろう。

私の生徒であるタロテスは頭が悪い、デブと虐められて登校拒否をしていた。そのせいでマティアさんは弱っていたのだが、最近はずいぶんと明るくなった。

マティアさんはとても気さくな方だけど、旦那様はとても身分のある方だ。家位かゐはエーゼ。上から二番目だ。一番目が傍系になった元王族が受け継ぐ特殊な物なので、実質一位と言っている。カリンのバルデス家もエーゼだが、同じエーゼでも上下があり、マティアさんのところはかなり力がある家らしい。彼女に気に入られているというだけで、十分すぎるほどの後ろ盾になるそうだ。

そんな家の子を虐めるなんて、子供の無邪気さが怖い。私が虐めた子の親だったら、自分の子供のしたことを知った途端、青ざめてしまうだろう。

「好きなことは忘れにくいですから。その代わり、集中しないと人の顔が覚えられなくて」最近、私の代わりに名前を覚えてくれていたラントちゃんが傍にいないから、とても

大変だ。

人の顔と名前を覚える。それがラントちゃんに求めていた一番重要な役目だった。ラントちゃんは単なる私のマスケットではないのである。

「んだよ、なんかついてるか？」

野菜ケーキに続き果物を食べ終えたラントちゃんは、彼をじつと見つめていたカリンを見上げた。

「ええ、果汁でお口がべとべとよ」

カリンがラントちゃんの口をハンカチで拭くと、彼は照れたようにそっぽを向いた。

その様がまあ何とも可愛らしく、カリンは楽しげに笑う。

「カリン、ラントちゃんは紳士的に護衛をしている？」

「ええ。とつても紳士的で親切だわ。色々なお話をしてくれるし、何があったのかも隠さず教えてくれたもの」

男というのは、女に厄介事を隠そうとする傾向がある。

ラントちゃんは、女だろぅが知るべきことは知るべきという考えのようだ。

「もしもの時は守ってやるって。こんなこと言われたのは生まれて初めて」

本当に紳士だな、ラントちゃん。ニース様はそういう言葉が言えなくて、姫様に片思

いを続けているっていうのに。

「私も言われてみたいわ、その言葉」

「おめえは必要ねえだろ」

ラントちゃんが私を睨み上げてきた。

そんな彼も可愛くて胸が高鳴る。

私がそんな風にときめいていると、廊下が騒がしくなった。

「何かしら」

エノーラお姉様が立ち上がり、部屋を出ようとした。しかしドアに向かう途中で使用人がやってきて彼女に報告する。

「奥様、テルゼ様の荷物が届きました」

「テルゼの？ テルゼ、これがルゼへのプレゼントかしら？」

エノーラお姉様が、嬉々としてテルゼに問うた。

「大きな車が牽かれてきましたので、テルゼ様には中身を確認していただきたく存じます」

大きな車？

一体何を持ってきた……

「ああ、届いたんだ。ルゼちゃんにいいかなあって、国王陛下下の献上品にするつもりだったやつを一匹持ってきたんだ」

献上品。しかも単位は「匹」。

こいつは何を持ってきたんだ。

テルゼが人間と貿易するために、目の飛び出るような高価な品々を国王陛下——ギル様のお父様に献上しているのは知っている。

しかし魔物……つまりラントちゃんのように見栄えの良い同胞を献上するようなことだけはしていないから、その献上品とやらは少なくとも魔物ではないだろう。地下の珍しい家畜やペットだろうか。

「生き物を献上したの？」

「そ。エノーラの所に空いている馬小屋があるって聞いたから、いいかなって。珍しいものだから、皆さんも外に出てご覧になってはいかがですか」

テルゼは笑みを浮かべて客のご婦人達を誘った。

「まあ、面白そう」

マティアさんが少女のように目を輝かせて立ち上がった。それを見て、石に夢中だったタロテスも顔を上げる。

「何？ テルゼさん何を持ってきたんだっ？」

「見てのお楽しみ」

タロテスの問いに、テルゼはにやりと笑って返した。

「ただし女の子をちゃんとエスコートしてやるんだぞ」

駆け出そうとしたタロテスは、テルゼに指摘を受けてフィーちゃんを見た。

タロテスの方が年上だが、二人は確か一つしか年が違わない。そしてフィーちゃんは何とも可愛い女の子だ。

フィーちゃんと目が合うと、タロテスの頬が赤くなった。フィーちゃんはそんなタロテスに呆れて先に行ってしまうことなく、笑って手を差し出した。

「いっしょに行きましょう」

いい子だ。なんていい子なんだろう。さすが私の弟子だ。

「まあ、なんていい子なんでしょう」

マティアさんもフィーちゃんの行動に感動して目を輝かせた。

「女の子は優しくしてよろしいですわね。私も最初は女の子が欲しいわ」

エノーラお姉様は、羨ましそうに庭に走っていく子供達を見つめて言った。

「確かに跡を継ぐこととか考えないなら、男の子より女の子の方が楽しそうですよね」

私がそう言ったとたん、ギル様が私の顔をじっと見てきた。

「あの……何か？」

「いや、お前に似た娘なんて……息子の方が使えるだろう」

「ギル様、まだ生まれてもいない赤ん坊まで使えるか使えないかで見ると見るのやめましようよ」

私は立ち上がり、ギル様を睨みつけた。

彼の一番の基準は、使える人材かどうかであるようだ。

「だいたい、子供以前にお互いに相手がまだいないってのが問題なんです。特にギル様の場合、条件が厳しいんですから！」

もしギル様のところに嫁に来てくれる人がいたとしても、そのお母様からの苛烈な嫁いびりが原因できっと逃げられてしまう。

何しろお母様ときたら、恋人ですらない私にまで普通なら死にかねない嫌がらせをしでくるし。

というか本当に何度か殺されかけたのだ。あれを最初の月の物が来た時にされていたら、私の暗殺は成功していただろう。二度目の月の物の時は、痛みでぼーっとしないように、ちゃんと薬を飲んだ。すると効果は靦面だった。動きを妨げられることなく、せい

ぜい「辛い」と感じる程度に症状が抑え込めると分かった時は安堵した。これなら、銅像の下敷きにするといった杜撰な方法で殺されることはないだろう。

ギル様のお嫁さんは、このような暗殺の手をかくぐる能力も必要とされるのだ。とても大変だ。私だったら嫌だ。これが仕事だと思っから耐えられるのだ。

「ほら、カリンも行くぞ」

ラントちゃんがまだ座っているカリンを促した。

「ええ、ありがとう」

そういえば、ついギル様には結婚する相手がいない的なことを口にしてしまったが、カリンはそんな、相手もない男に手ひどく振られたのだ。思考が止まるのも仕方がない。いびり殺されるから常人にはギル様の嫁になるのは無理なんだと、後でちゃんと説明した方がいいだろうか。

庭の開けた場所に、馬に牽引された荷車がやってきた。

荷車の上には、大きな布で覆われた、これまたかなり大きな四角い箱形の荷物があつた。荷車から馬達が離されたので、私達は恐る恐る近づいてみる。

「い……一体何が」

ラントちゃんまで驚いたように見上げているから、地下ではこういう贈り物がよくある、というわけではなさそうだ。

テルゼはニヤニヤと笑いながら、荷車と覆いの布を繋いでいた紐をほどく。

「じゃあ、外すぞ」

テルゼは皆の反応を見ながら、一気に覆いを外した。

私達はその下にあった檻の中を見て、悲鳴にも似た歓声を上げた。

白い。

白い竜だ。

「か、可愛い」

爬虫類だったのに、私は思わず声を上げた。

前にテルゼに乗せてもらった竜よりも小柄で、真っ白だった。顔立ちもなかなかの美人さん。気位が高そうな子だ。

思わずふらふらと檻に近づいて触れようとした途端、テルゼに肩を掴まれる。

「待て待て。慣れるまでは触ると嘔むから」

「慣れるって？」

「初めての地上で、初めての長旅だから興奮してるかもしれない」

「ああ、そっか」

竜は私に向かって威嚇した。

毛のある生き物だったら、全身が逆立っていただろう。その目は、隙あらば嘔み殺そうと狙っているかのようだ。

私はそんな恐ろしい様子を見せる白竜の顔をそろそろと覗き込む。

竜族のような金色の瞳も、このように気品のある竜にはめ込まれていると嫌悪感を覚えることもない。

「綺麗」

姫様の金の瞳も綺麗だし、この色は気品がある人が持つと、魅力になるものらしい。

「だろ？ ちょっと気性は荒いけど、こいつが一番ルゼちゃん好みだし、君なら乗りこなせると思うってさ」

私は相変わらず威嚇してくる竜と目を合わせた。

動物は人間よりも素直だ。力の差を見せてやれば簡単に服従する。

さすがに妖鳥の時よりは難しいけど――ほら。

「きゅうううう」

白竜が服従の意を示すようにしゃがみ込む。

「ええっ!？」

皆が声を上げた。

「いや、あの、ルゼちゃん、この短い時間で何をしたんだ……?」

テルゼは突然大人しくなった竜を目の当たりにし、慄いて問う。

「動物っていうのは強い相手には従うものよ。馬とかに突然やると怯えて使い物にならなくなるけど、魔力に慣れている竜なら大丈夫でしょ。竜は魔力を敏感に読み取る生き物だから扱いやすいし」

「魔力で脅しつけたのか」

テルゼが呆れたように言った。

私は檻に手を入れて、白竜の頭を撫でた。鱗がつるつるして気持ちが良い。

振り向くと、皆一様に啞然としていた。

ただギル様だけが思い悩むように額に手を置いている。前にマリーちゃんをやったことがあるから驚きはしていないようだが、思うところはあらしい。

「テルゼ、この子の名前は？」

「キュルキュだよ」

「……変わった名前ね」

「ちなみに女の子だ」

真っ白い女の子。

素晴らしい。可愛い。

テルゼは運んできた閼族に手ぶりで指示をする。すると檻が開けられたので、私はキュルキュの肩を押して彼女を外に出した。

「逃げたりしないのか？ 万が一のことがあったら大騒動だぞ」

ギル様はキュルキュを指さして問う。誰も手綱を持っていないから、逃げ出すのは簡単だろう。

「俺達の言うことは聞くから大丈夫。うちで育ててるんだ。名産品みたいなもん」

「なるほど」

そうこうしているうちに、テルゼの部下が鞍をつけてくれた。前に見た、二人乗りも出来るタイプの物だ。

「ねえ、一人で乗ってみたい」

私は鞍を撫でながら言ってみた。

「え……ルゼちゃん、そんなに俺と相乗りするの嫌？」

「よく分かっているじゃない」

「そ、そんな……」

テルゼが落ち込んでキュルキュの首筋に抱きついた。

「冗談よ。相乗りは前にしたから、今度は一人で乗ってみたいだけ」

「まあ、ルゼちゃんならいきなりでも平気だろうけど。基本は馬術と同じ。前に簡単に説明したの覚えてるか？」

「ええ、覚えてるわ。ヘルちゃんにも教えてもらったから大丈夫よ」

私はキュルキュの背に手を置くと、スカートを翻して跨がった。

「お前、本当に一人で飛ぶのか!」

タロテスがマティアさんの背に隠れながら聞いてくる。

気になるけど怖いようだ。ヘタレな子だな。

「もちろんよ。竜には前に乗ったことがあるの」

スカートが捲れてないか気にしつつ、さらに周囲を確認する。

問題なし!

「よし、行けっ!」

私はキュルキュの腹を足で圧迫する。基本は馬術と似たようなものだとテルゼは言ったが、移動方向は前や横だけでなく上下もあるので、操り方が少し複雑になる。が、ま

あ大丈夫だろう。

竜は翼を広げて地を蹴り、私を乗せて大空へ羽ばたいた。

それほど高く飛ばず、以前ヘルちゃんと相乗りした時に聞いた操り方に従って動いてくれるのを確認して、しばらく周辺の空を飛ぶ。

近くの木々で長閑に羽休めしていた鳥達が、竜の鳴き声と羽ばたきを聞いて狂乱する姿に、思わず笑いがこぼれた。

キュルキュは細身だが、羽ばたきは力強くて頼もしかった。こうして一人で手綱を握るのには、誰かと相乗りするのとはまた違った楽しさがある。

私達に気付いた人々がこちらを指さしている。こうして見下ろすと、エノーラお姉様のお屋敷は他よりも凝ったデザインで、立地的にもいいところがあるのがよく分かる。

慣れてきたのもう少し高い場所まで行き、キュルキュに問題が無さそうなのを確認して一度地上に戻る。スカートが捲れ上がるのを手で押さえて、鞍の上で少しつんのめりつつも無事着地した。

完全に制止すると、スカートを気にしながらキュルキュの背から飛び降りた。

「ただいま」

スカートの裾を払って伸ばしながら皆に笑ってみせる。

「ねえねえ、ルゼって竜に乗ったことがあるの？」
子供達を連れて近づいてきたセルジアスが尋ねてくる。

「一人では初めてだけど」

「物怖じしないねえ。たまにはきゃーとか言ったらいいのに。竜を見て可愛いつて飛びついていきなり乗るなんて、君ぐらいだ」

「じゃあゴキブリが出たらきゃあきゃあ言うから助けてね」

「あ、それ僕も怖い」

情けない男め。ゴキブリ退治は、男が女の前で最も輝ける瞬間だというものに！

「君はゴキブリは嫌なのに、竜は平気なの？」

いや、ゴキブリと比べるのが間違っている。まあいいけど。

「私は昔から高いところが大好きなの」

「そういう問題じゃないと思うけど？ それに、癖も分からない竜に乗るなんて」

「この子は素直でいい子だもの」

「なんだかねえ……」

塀の外から、竜が飛んでいたと騒ぐ声が聞こえてきた。ここは住宅街だから、目立って当然だろう。

周囲が突然騒がしくなったせいも、キュルキュが興奮し出したので、前に回り込んでその喉を撫でた。

「いい子だったわね」

「ははは、初めて乗ってそう言うのは君だけだよ。さすがに一瞬で手懐けるとは思わなかった」

テルゼが愉快と笑い、私は余裕の笑みを返す。

「動物と心を通わせるのに時間は関係ないわ」

「いや、心ついていうか明らかに力で服従させてるし」

セルが楽しそうにそう言った。

「竜騎士って言ったら、騎士の中でも特に選ばれた超エリートだよ。竜って簡単に従う生き物じゃないから。地下の竜って地上の竜より大人しいのかな」

「まあ、元々こいつは大人しい南の方の竜だし、今では家畜化されてるからなあ。気が荒い方でも、この国の竜よりは扱いやすいかもな」

竜騎士は、竜を乗りこなせるからこそ称えられる。

つまり竜とは本来なら簡単に乗りこなせないものなのだ。

「すげえ。お前すげえな！」

「おねえさますごーい」

子供達がキラキラと目を輝かせて見つめてくる。タロテスにここまで感心されたのは初めてだな。彼らは乗りたそうにうずうずと私を見ている。

乗せてあげたいけど、いきなりじゃ母親達が心配するだろう。私は視線を巡らせて、ぼかんとしているカリンに目を付けた。

今日の主役は彼女だ。

「カリン、どうしたの、ぼーっとして。あ、乗りたい？」

私は彼女のもとへ歩み寄り、手を差し出した。

「えっ？」

彼女は呆けたように私を見つめ、同じように手を差し出してくる。

私はそんな、ちゃんと前を見ているのか疑わしい夢現なカリンの手を取った。

エノーラお姉様が世話をしているせいとか、彼女からは花の匂いがした。

エノーラお姉様はゼルバ商会の中で、婦人部門の責任者を務めている。香りも美容の一部と、親しい人にはそれぞれに似合う匂いの香水を作ってプレゼントするのだ。それがなかなかいい宣伝になるらしい。

最近エノーラお姉様は安全のためと称してカリンを連れ歩いているから、彼女にも自

社製品を身につけさせて、宣伝に利用しているはずだ。カリンは目に見えて綺麗になったから、その宣伝効果はかなり高いのではないかと思う。

「あっ、えっと、あのっ」

無意識で手を差し出していたのか、私が手を取った瞬間、彼女の目の焦点が合い、戸惑いの声が上がった。

「怖い？」

私は彼女の顔を覗き込んで問う。

普通は怖いだろう。誘っているのがギル様のような完璧な王子様ならともかく、私はそのただの女だ。身を任せるのは不安だろう。実際には誰よりも安全な同乗者なのだが。

「いいえ」

そう答えた瞬間、彼女は驚いたような顔をした。

彼女は本当はとてもしつこく大人しい少女だから、竜に乗ろうなんて誘われて思わずふらふらと手を差し出してしまったことに自分自身驚いてしまったのかもしれない。

私は彼女の出した答えに満足して笑い、そのままキュルキュウの傍らまで手を引く。

「テルゼ、念のため紐貸してくれない？」

「ベルトがある」

エノーラお姉様の屋敷に住み着いているテルゼの部下からベルトを受け取る。これで多少のことは大丈夫。

そして彼女の腰に手を回して片腕で抱え、もう片方の腕で自分の身体を引き上げて竜の背に乗る。

私はそのまましっかり跨り、前にカリンを横座りさせた。

「うっそ」

カリンが驚いて声を上げた。

あれだけ目の前でナイフバトルをしたのに、今更驚いているようだ。カリンがそれ以上言葉を出せないでいる間に、彼女のドレスの裾をさつと整えて、横座りのまま落ちないように座り直させる。そしてベルトで彼女の身体を鞆に固定した。

私はカリンの片手を引いて、鞍の前に付いた取っ手に誘導した。

それで準備は整った。

「大丈夫。しっかりとそれを掴んで、もう片方の手で私にしがみついたらいいわよ。私も落ちないようにずっと支えているから」

そう言うと、彼女は後ろに座る私の腰に片腕を回した。柔らかい感触に、私は小さく唸った。

最初に会った、ふつくらしていた時よりも痩せたのは間違いない。しかし、それでも女性特有の柔らかさがあるのだ。とても抱き心地がいい。ギル様好みの『華奢』とか『折れそうな腰』といったタイプとは違う、普通の男の人が好む健康的な身体なのだろう。

羨ましい。私も肉をつけたらこうなれるだろうか。

「ど、どうしたの？ やっぱり重かった？」

「いや、そういうのじゃないから。じゃあ行くよ」

カリンは私を見上げ、興奮ぎみに顔を赤くして頷いた。

キュルキュが翼を広げた瞬間、カリンがぎゅっとしがみついてくる。こうして腰に触れられるのは、少しくすぐったいかもしれない。

「きゃっ」

翼が動くときスカートの裾が捲れ上がり、カリンが悲鳴を上げた。私は彼女のスカートを手で押さえながら、太股の下に挟んで押さえ込む。これでまあ大丈夫だろう。

竜が地を蹴ると、カリンは振動に驚いたのか歯を噛みしめて私にしがみつく。私も彼女を安心させるように強く抱く。

浮遊感があったかと思うとわずかに落下し、今度は一気に上昇する。怯えながらもカリンは私にしがみつき、しっかりと目を開いていた。

景色が激しく揺れる。その間にキュルキュはものすごい勢いで屋根を越えていき、屋敷や人が、高い塔から見下ろした時のように小さくなった。

「もつと上に行こうか」

先ほどよりも上に、とにかく上昇していく。

都が見渡せるようになった頃、キュルキュの上昇を止めた。

そこでキュルキュが風に乗ると、動きが穏やかになる。景色がぶれずにはっきりと見えるようになると、カリンも落ち着いて首を巡らせた。

「うわあ……」

カリンは眼下の街並みではなく、遠くに見える山々の方を見て声を上げた。

都から離れた所に広がる森は、その向こうにある山脈まで続いている。山脈の頂上付近には雪が積もり、独特の形をした岩稜が臙氣おほろけに見える。

少し視線を横にずらすと、都まで流れる川があり、その上流に見えるのは避暑地として名高い大きな湖。恋人達にも人気が高いらしい。

私にとってはそれほど心動かされる光景ではないが、都会育ちのカリンには何もかもが珍しいようだった。

「すごい……すごい」



カリンの口から、短い感想が漏れた。

過剰に飾られないその言葉は、心からのものだろう。

「カリンには、ああいう景色の方がいいのね」

「ええ。ああいう所にラントのおうちの入り口があるのかしら」

どうやらラントちゃんに色々との外のことも教えられたようだ。

「地下への入口は山の方にはあまりないわ。それよりも、あのあたり。二つ村があるでしょ。あの中間をもう少し山の方に行った辺りが怪しいわ。村を線で結んで、森の中に三角形の頂点を置いてみて。そこを中心にして探すの」

「へえ」

「とは言っても、穴を開けるだけならともかく、こんな都に近い場所で略奪なんてしないわ。討伐隊が出るに決まっているもの。魔物討伐は新人騎士の訓練にもちょうどいいし。それに、人間からの略奪行為は、魔物の世界でも違法なの。それで人間を怒らせて、地下の国……この真下は五区ごくのインカータというんだけど、そのインカータが管理している空気穴とかまで徹底的に潰つぶされたら、さすがに彼らも賊狩りを始めるわ」

「そういうえば、ラントも都の周辺では外に出て木の実を拾ったりするだけだろうって。あの辺りは地上も地下も要地に近いつて意味だったのね」

ラントちゃんもそんな木の実を拾うだけの魔物であれば、私のベットにはならず済んだのに。

「魔物は、規模の大きい街よりは規模の小さな街、後は視界の悪い街道に出ることが多いわ。国境沿いも狙われやすい。でも被害者は人間側だけとは言えないのよ。たまにラントちゃんみたいに小さくて無害な獣族じゅうぞくが、うっかり人間と出会って捕まって、裏で愛玩あいがんとして売買されているの」

「えっ……」

カリンは驚いて私を見た。人間がそんなことをしているなど聞いたこともないのだろう。

「ラントちゃんが売られてたら、違法でも欲しくなる気持ちは理解できるでしょ？」

その言葉に、カリンは小さく頷いた。

「……私の知らないことが、世の中にはたくさんあるのね」

「そりゃあそうよ。私の知らないことだってたくさんあるわ。今みたいなことを私が知っているのは、たまたまそういうことに関わっている場所で育ったからっていうだけ。逆に宮廷内のことはよく分からないわ」

私達は遠くを見つめて言葉を交わし合う。